

## ケアハウス入居高齢者のストレングスに関する一考察

### A consideration of strengths for the elders in the care house

坂上 真理

#### はじめに

わが国は、1970年代以降急速な高齢化を迎えた。高齢者においては、かつてないほどに長期化した老後をいかに生きるかということが問い直されている。高齢期は心身機能の低下や社会的役割の変化を経験する機会が増加することから、一般的に「喪失期」として語られることが多い。高齢者に対する若者の意識について各種調査が行われているが、全体的には否定的な印象をもつ傾向が強いという結果も報告<sup>1)</sup>されている。しかしながら、高齢期はネガティブな側面を持つだけではなく、同時に長い人生経験から得られた洞察力や知識・技術が蓄積された時期ともいえる。

ところで、これまで弱者ととらえられてきた障害者に対して、彼らが本来有する強さや成長力すなわちストレングスに焦点を置いた援助が、ストレングス視点として1980年代後半から注目されるようになってきた<sup>2)</sup>。高齢者の自律性や多様な生き方を尊重し彼らの生活の質を保障していくためには、高齢者自身も援助する側も高齢者が本来有するストレングスを十分に理解する必要があると考える。ストレングスのとらえ方に関して、幾つか指摘がなされている。Weick<sup>3)</sup>は、ストレングスについて、人びとの広範な才能、能力、キャパシティ、スキル、資源、願望であると述べている。さらに、表現される心的、身体的、情緒的、社会的、精神的な潜在能力を含むとしている。この他にも、道徳的勇気、不屈の精神、活力などを意味すると述べるもの<sup>4)</sup>や、人びとの間で社会的、歴史的に構成されてきた知恵、価値、信念、

確信などを含むとする指摘<sup>2)</sup>などがある。Rapp<sup>5)</sup>は、ストレングスを個人的要素と環境的要素から説明し、個人の強さとしての熱望、能力、自信と、環境の強さとしての資源、社会関係、機会をあげている。このように、ストレングスのとらえ方は顕在化しているものあるいは潜在化しているものを含み多岐に渡っている。しかし、これまでの報告はストレングスやストレングス視点の意義あるいは特質を述べるに留まり、高齢者が日常生活の遂行時にどのようなストレングスを活用しているかを具体的に提示したものはほとんどない。そこで、ストレングスを積極的に視野に入れた援助方法を確立するためには、高齢者が環境変化や心身の変化に直面しながらもどのようなストレングスを用いているかを高齢者の生活に深く迫りながら調査することが必要である。なお、本稿では調査協力者を、日常生活の遂行に支障をきたし始めた虚弱な高齢者のうち、生活拠点の移動を経験した者とした。本稿でいう虚弱な高齢者とは、「現在の心身状況では自炊が出来ない程度の機能低下があるか、もしくは独立して生活するには不安が認められる方」である。

生活拠点の移動を経験した虚弱な高齢者は、安定した日常生活を送るために実際にどのようなストレングスを用いているのか。各々のストレングスはどのように関係し合っているのか。本稿は、生活拠点の移動を経験した虚弱な高齢者が日常生活で用いるストレングスと、各ストレングスの関係をインタビューによって明らかにし、今後高齢障害者の主体性を尊重した援助を考えていくための基礎的資料とすることを目的とした。

## 協力者と方法

データ収集と分析の方法に関しては、高齢者の視点から“主体としての高齢者”の生きざまを理解することが重要と考え、emic perspective<sup>6)</sup>（ある環境の中で生きる内部者の視点）を特性にもつ質的研究のうちグラウンデッド・セオリー・アプローチ<sup>7)</sup>を用いることとした。

グラウンデッド・セオリー・アプローチは、データに密着しながらそれらの類似性と相違性を継続的に比較分析することにより研究領域に関する簡潔な理論上の公式を導き出すための質的研究の一方法論である<sup>7)</sup>。

協力者は、北海道のAケアハウスの入居者のうち、あらかじめ研究の目的および方法を説明したうえで協力依頼に了承していただいた方である。協力者の選択にあたっては、調査開始の最初の1週間に著者が参与観察を実施した。生活様式に着目し「基本的日常生活動作を除く施設内活動への主体的な参加」を基準として、施設内外の複数の

日課に主体的に参加されていると考えられた方から調査協力の依頼を開始した。その後、生活様式が異なる方のストレングスを把握するため、施設職員から入居者の日々の過ごし方に関する情報を得て、居室にて過ごされていることが多い方にも調査依頼を行った。最終的に分析対象となったのは10名（女性8名、男性2名）であった。協力者の概要を表1に示した。年齢は69～87歳であり、その構成は60歳代1名、70歳代5名、80歳代4名であった。

データ収集の方法は、半構造的面接と参与観察を実施した。著者が直接各協力者の居室を訪問し、面接調査を行った。質問項目(表2)は、1. 過去の生活に関すること、2. 現在の生活に関すること、3. 場所に関すること、4. 対人交流に関すること、5. 現在の生活に関すること、6. ストレングスに関することについて尋ねた。さらに、生活の質を把握する際の参考とするため、世界保健機構が主観的幸福感を測定するために作成したWHO/QOL26<sup>8)</sup>を実施した。WHO/QOL26は、身体

表1 協力者概要

氏名	年齢	性別	入居前状況	利用している社会資源	WHO/QOL-26 点数
A	82	女性	有料老人ホーム		4.08
B	71	女性	独居		3.96
C	70	女性	同居		3.96
D	85	女性	独居	ヘルパー	3.73
E	69	女性	同居		3.50
F	72	男性	独居		3.38
G	76	女性	夫婦世帯		3.35
H	81	女性	軽費老人ホーム	ヘルパー	3.04
I	73	女性	—		3.00
J	87	女性	軽費老人ホーム		—

表2 質問項目

1. 過去の生活に関すること	・ケアハウスの入居理由 ・以前の生活の様子
2. 現在の生活に関すること	・ケアハウス内での過ごし方
3. 場所に関すること	・よくいる場所、よく行く場所はどこか ・よくいる場所ではどのように過ごしているか
4. 対人交流に関すること	・どのような人と会っているか
5. 現在の生活の捉え方	・現在の生活をどのように思っているか ・現在、不安に思っていることはあるか
6. ストレングスに関すること	・楽しみや目標にしていることは何か ・特技や趣味は何か ・思い通りの生活ができていますか
7. 主観的QOLに関すること	・WHO/QOL-26の施行

的領域・心理的領域・社会的関係・環境・その他の領域の5領域26項目から構成されている。すべての下位項目、すなわち反応尺度1～5のスコアを得点とする。

なお、面接時間は1人45～120分で、協力者の了解を得てカセットテープに録音し、その後逐語録を作成した。その他、参与観察から得られた情報は記録に残し、入居者の生活の様子やケアハウス内の生活空間の使用状況、そして面接内容を理解するために補完的に使用した。

### データ分析の手順

データ分析に際しては、どのような要素を抽出するかを決めるための予備的分析と具体的なストレングスの抽出を行うための本分析の2段階の手続きをとった。

#### 1. 予備的分析

冒頭にも触れたようにストレングスの解釈は報告者によって多岐に渡っている。そこで、ストレングスとしてどのような要素を抽出すべきかを決定する目的で予備的な分析を行った。この予備的分析には本分析で使用したグラウンデッド・セオリー・アプローチではなくKJ法<sup>9)</sup>を用いた。KJ法は、複数の要素をそれらの類似性に配慮しながらグループ化し、最終的にある仮説を発想させる方法である。この分析には協力者のうちWHO/QOL26の点数が高かった上位3名を対象に行った。協力者の逐語録の中から協力者のストレングスすなわち「強み」、「長所」、「(潜在的な)能力」と考えられる単語やセンテンスを抽出した。その結果、151の単語またはセンテンスを抽出した。151の単語またはセンテンスは類似するものをグループにして、それらの包括的な意味内容を表す言葉をラベルとして付けた。さらに得られたラベルのうち類似するものをグループ化し、新たにラベルを付けるという作業を繰り返した。この作業により、最終的に「目標、夢」、「過去の体験」、「技能」、「友人、仲間」、「リサイクル」、「日課(ルーチンワーク)」、「情報収集」の8

つの要素を得た。

#### 2. 本分析(表3)

本調査の協力者が用いている具体的なストレングスの抽出とそれぞれのストレングスの関係を検討することを目的に本分析を行った。

先の予備的分析において見出された8つのストレングス要素と、先行研究<sup>2~5)</sup>が指摘しているものとを比較した。その結果、予備的分析の結果はRapp<sup>5)</sup>がストレングスモデルで示した要素と類似することから、ストレングスモデルが示している要素を参考に協力者のストレングスを再度抽出することとした。

ストレングスモデル<sup>5)</sup>とは、Rappがストレングス視点を基盤に特に精神障害者への援助の実践から提唱したモデルである。ストレングスモデルは「全ての人は目標、能力、自信をもっており、全ての環境は資源、社会関係、機会を内在している」と仮定し、さらに「目標の達成とそれに伴う生活の質は、個人と環境からなるストレングスの2つの要素と、生活空間によって決定する」と考えている(図1)。ストレングス視点やストレングスモデルの特徴は、望まれる成果に向かっているその過程を重視していることである。この点で、問題点の特定とその原因除去を目指す従来の病理/欠陥モデルとは異なっている<sup>5)</sup>。

今回の予備的分析の結果とストレングスモデルの対応を検討すると、「目標、夢」はストレングスモデルが示す「目標」に対応していると考えられた。その他、「過去の体験」は「自信」に、

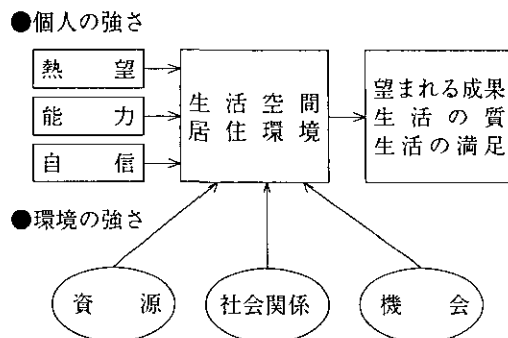


図1 ストレングスモデル<sup>5)</sup>

「技能」は「能力」に、「友人、仲間」は「社会関係」に、「リサイクル」は「資源」にそれぞれ対応していると考えられた。

本分析にあたっては、予備的分析を行った3名を含む10名の逐語録の中から、「目標」、「自信」、「能力」、「社会関係」、「資源」、さらにストレスモデルが指摘する「機会」を加え、それぞれに関連していると考えられる単語やセンテンスを新たに選択し直した。選択した単語やセンテンスには、関連箇所に着目しその意味を解釈しながらそれぞれに概念的なラベル付けを行いそれを「一次コード」とした。この段階はオープンコーディング<sup>7)</sup>と呼ばれている。全協力者の「一次コード」を抽出した後、それぞれを再度見直し修正が必要なものについてはさらに「修正コード」を付け直した。つづいて、類似性と相違性に従って複数のコードをまとめ抽象的な概念を付けた。こうして得られた複数の概念をさらにまとめるという作業を繰り返しながら、「サブカテゴリー」や、それらを統合した「カテゴリー」を求めた。

「カテゴリー」の妥当性の吟味は、そこに含まれる概念をもとに特性を求め検討した。さらに、特性と含まれる概念の内容から各「カテゴリー」の説明文を付けた。説明文を付けた後、逐語録のデータからカテゴリーの説明が可能かを再検討した。なお、これら分析段階の具体例を表3に示した。

## 結 果

### 1. 協力者の生活実態

10名中1名(男性)が夫婦で入居していたが、他は全員が単身で入居していた。また、規則的に参加する活動や外出の機会をもつ者が10名中7名いた。具体的な活動は、礼拝等の宗教的な日課、ケアハウス内のサークル活動、ケアハウス以外のサークル活動であった。その他、10名中5名が、ケアハウスの入居後に新しい趣味活動を始めていた。そのうち、2名は「70の手習い」と称し、ケアハウスの入居をきっかけに自ら希望して習い事を始めていた。他の3名は、他入居者やケアハウ

表3 本分析におけるカテゴリーの抽出例(目標)

キ - ワ - ド	一次コード	修正コード	サブカテゴリー	カテゴリー	特 性
・それ(手工芸)は一切やめちゃって、教会の仕事にはほとんどかかきなく出ているの ・人の悪口言うのと、嫁さんの悪口言う。そういう人は別に、(私の部屋)に来ないでちょうだいと始めから言っているの	過去との決別/教会行事の優先線引き	専念する	やりたいことに専念する	最後の仕上げ	積極的 長期的 統合
・みんなに喜ばれるもんだから、 <u>一生懸命作るようになった</u> ・楽しく一日過ごすよね、嫌な思いして一日過ごすよね、やっぱり楽しくしたいしねえ。だから、「今は青春時代だね」って、ははは。	喜んでもらう 楽しい一日を送る	本来の価値に従う 本来の価値に従う	やりたいことに専念する やりたいことに専念する		
・70の手習いで、少し何かものにできたらね、ちょっと生きがいになるのかなあって思って。パッチワークに挑戦して、1年ぐらい習ったのかな	新しいことを始める	新しい技術	新しい技術の習得	新しさを求める	積極的 短期的 変化
・松葉の房がきれいに咲いているでしょ。松葉ぼたん作ってみようかなと思うんだけど、葉っぱがどうも。フェルトでやってみては、できそうだなあとって。	作品を創る	創作する	創作的な活動		
・病気をしないことに気をつける。 <u>暴飲暴食しないってこと</u>	健康管理	悪い状態にならない	欲求をおさえる	現状を維持する	非積極的 短期的 抑圧的
・歳だなあとって、アルコールは飲まないようにしようと思ってるもんだから、結局物忘れしたり、そういう傾向があるんだよね。	アルコールの制約	悪い状態にならない	欲求をおさえる		
・自己防衛が最大の楽しみっちゃうか。悪い言葉で言えば一食ごとに死を待つようなもんですよ。	死を待つ	死を待つ	ただ死を待つ	死を待つ	非積極的 長期的

ス職員に誘われたのをきっかけに始めていた。一方、80歳代の中にはケアハウスの入居をきっかけに、これまで行っていた趣味活動を一切やめ、宗教活動に専念する者がいた。趣味活動を行う際には、小石や空箱、空き時間の食堂をうまく活用している者がいた。その他、他入居者の生活を詳細に把握しており、面接中他者の趣味活動の様子や福祉機器を使用している姿を詳細に語る者がいた。

WHO/QOL26を実施した者は10名であり、1名が実施の途中で中止した。WHO/QOL26の結果は、5点満点中、最高4.08点、最低3.00点であり、平均は3.56±0.41点であった。領域別の平均点は「身体的領域」は3.58±0.49点、「心理的領域」は3.42±0.51点、「社会関係」は3.53±0.48点、「環境」は3.69±0.48点、「その他」は3.88±0.82点であった。

## 2. 協力者のストレングス (表4)

今回の結果では、Rappのモデル<sup>5)</sup>と同様に個人のストレングスである「目標」、「行動能力」、「過去の行動」が、そして環境のストレングスである「社会関係」、「資源」、「機会」のストレングス要素が見つかった。最初、ストレングスモデルが示した要素を基にそれらを逐語録から抽出したが、本協力者のデータをまとめ直す過程において、個人のストレングスは「目標」、「行動能

力」、「過去の行動」に修正された。なお、環境のストレングスは修正されなかった。次にそれぞれの要素を説明する。下線部はカテゴリまたはサブカテゴリを示した。

「目標」は、個人が未来に向かって目指すものであり、今回は「最後の仕上げ」、「新しさを求める」、「現状を維持する」、「死を待つ」のカテゴリが見つかった。「行動能力」はこれらの「目標」を達成するために必要な情報や資源を獲得する能力であり、「(他入居者の様子を)観察する」、「(使える物や方法を)発見する」、「(余った時間や物を)活かす」、「誘い合う」のカテゴリがあった。「過去の行動」は、今回は特にケアハウス入居に関わる行動であり、「(入居を)決断する」、「(望む施設を)自ら選ぶ」、「(入居後の生活を考え)準備する」がカテゴリであった。他方、環境のストレングスのうち「社会関係」は、他入居者、友人、孫などで「(新たな欲求を引き起こす)刺激となる人」、「(今後の生活の)見本となる人」、「(自分の行動や決断を)承認してくれる人」がここに含まれた。「資源」のカテゴリは、「リサイクルできる資源」、「自然の材料」であり、「機会」のカテゴリは空き時間の食堂や殺風景な壁や受付台などの「使える空間」であった。

表4 分析結果

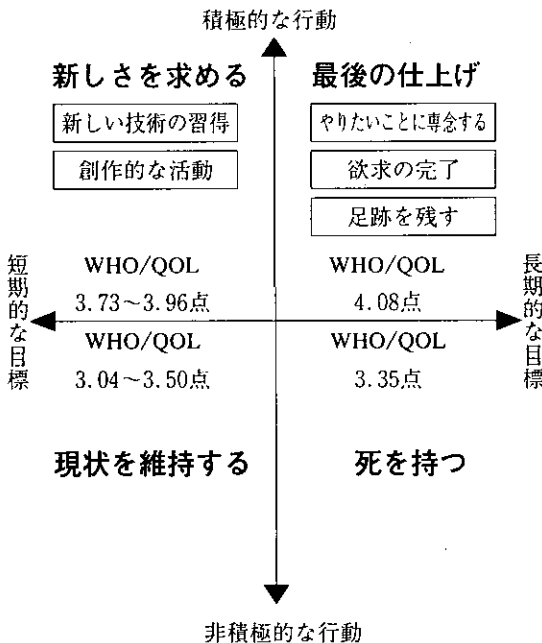
	ストレングス要素	カテゴリー
個人のストレングス	目 標	「最後の仕上げ」 「新しさを求める」 「現状を維持する」 「緩やかな死」
	行 動 能 力	「観察する」 「発見する」 「活かす」 「誘い合う」
	過 去 の 行 動	「決断する」 「自ら選ぶ」 「準備する」
環境のストレングス	社 会 関 係	「刺激となる人」 「見本となる人」 「承認してくれる人」
	資 源	「リサイクルできる資源」 「自然の材料」
	機 会	「使える空間」 (空き時間の食堂、殺風景な受付台)

考 察

1. 「目標」の Kategorii の類型化 (図2)

今回の協力者全員には「目標」が認められた。高齢者の生活の質に関して、高齢者は時間的なゆとりをもち、生き方そのものが問われ、さらに人生をどのように全うするか目標が重要になる<sup>10)</sup>と言われている。ストレングスモデルにおいても、「目標」の重要性を示している<sup>5)</sup>。そこで「目標」の Kategorii について、詳細に検討した。

「目標」の4つの Kategorii は、長期的な展望と短期的な展望といった時間的特性と、積極的あるいは非積極的な行動を伴うものという行動の特性によって分類することができると考えられた。参考としてWHO/QOL26の点数を Kategorii ごとに示すと、「最後の仕上げ」には4.08点の者、「新しさを求める」には3.73~3.96点の者、「現状を維持する」には3.04~3.50点の者、「死を持つ」には3.35点の者がそれぞれ属した。次に、それぞれの Kategorii について説明する。



太文字ゴシック：カテゴリー、□：サブカテゴリー

図2 「目標」の Kategorii の関係

「最後の仕上げ」

長期的な展望の中で取り組まれる目標であり、目標達成に向けての積極的な行動を伴う「目標」である。本調査では比較的高齢な者に認められた。人生の終末を迎えるにあたり、自分自身が本当にやりたかったことや価値をおくことをやり遂げることを目指すことである。

A氏(82歳)は熱心に信仰している方であり、現在入居しているケアハウスにも、信仰に専念するために強く希望して入居した。

『以前ここに来る前はね、手先のことが好きでお人形作ったり、アートフラワーっていうのかな、お花作ったり、押し花を作ったり、ありとあらゆることやったんですけどね、もうここに来たらそれは一切やめちゃってね、それから最後の仕上げと思って教会の行事にはほとんどかかさず出ているの。』

また、J氏(87歳)は、大半の時間を自室で和紙細工の作成をしながら過ごしていた。完成したほとんどの作品は、他人(他入居者、訪問者、家族)に渡し、貰った人が喜ぶ姿を最大の楽しみにしていた。

さらに、「最後の仕上げ」には、本当にやりたいことに専念する、欲求の完了、足跡を残すのサブカテゴリーが認められた。先のA氏は、現在の入居をきっかけに全ての趣味活動をやめ宗教に専念していた。C氏(85歳)は、約90分の面接の間、何度も『ねえ、おもしろいでしょう』と語りかけ、笑い声が絶えなかった。現在、取り組んでいる活動は多岐に渡っていたが、C氏は一貫して楽しむことに専念していたと思われた。欲求の完了は、過去の体験とも関連している。A氏は、過去に対して欲求の完了感を抱き、現在は本当にやりたいことに専念していた。他方、比較的年齢が若い者の中には、義務的役割からの解放に伴い、自らの欲求が爆発的に開花している者もいた。その姿は、これまでしまっておいた欲求を全てやり遂げようとする姿とも見てとれた。

D氏(70歳)『ここでも職員でピアノ弾く人がいるから、わかんないとこ教えてもらったりとか。

だいぶね。もう今やみつきたいになっちゃってね。でもこっち（琴）もやめられないもんね。折角覚えたのね。それに好きだから。そして山にも行きたいし。．．合唱は練習あるし。まあ、夜だからいいんだけどね。もうほんとうにね、過労死するんじゃないかって、いや、ほんとに。目の前暗くなる時あるもんね、時々。』

また、足跡を残すに関しては、複数の協力者が居室内に綺麗に整理されたアルバムを持っていた。G氏（76歳）も棚いっぱいアルバムを示してくれた。同様のことは複数の面接場面に見られた。

### 「新しさを求める」

「最後の仕上げ」と同様に、積極的な行動を伴う。ただし、「最後の仕上げ」が高齢期や終末期のあり方を視野にいれて取り組まれていたのに対し、この「目標」は到達する時期については特に意識されていなかった。なお、サブカテゴリーとして新しい技術の習得と創作活動が含まれた。

B氏（70歳）は、入居をきっかけに習い事を始めた。先生の教えなしに一人でできるようになることを「目標」にしていた。

『70になって入ったんでね、70の手習いで、今からものにできたら生きがいになるかなと思ってね、パッチワークを習っているグループがあるっていうんでね、挑戦してまだ1年。先生に聞きながら、やっと作ったもんね、まだまだ、一人歩きするようなね、今度はしておかないとね。』

D氏も同様に70になったら何か始めようと考えていた。そこで、以前から興味があったピアノを独学で習い、現在はレパートリーを増やすと共により難しい編曲が弾けることを「目標」にしていた。

また、J氏は、散歩の際に拾い集めた小石や松かさを材料にして作品を作っていたが、工夫することで様々な作品ができあがること、すなわち創作活動を楽しみにしていた。

### 「現状を維持する」

日常生活で生じる欲求を押さえ込んで、現状を維持しようとする「目標」である。比較的短期的

な展望の中で取り組まれ、非積極的な行動を伴う。これを「目標」にしている場合は、喪失体験を伴う傾向にある。

F氏（72歳）は、これ以上健康状態が悪くならないことを「目標」にし、日常生活で生じる欲求を抑圧することで現状を保とうとしていた。

『歳だなんて思って、もうあんまりアルコール飲まないようにしようと思っているもんだから。前は毎日のように飲んでたんだ。じゃ、よくないからね。アルコール類はあまり飲まない方がいいね。結局物忘れしたり、そういう傾向があるんだ。』

### 「死を待つ」

最後のタイプは、先の「現状を維持する」に類似するが、将来（死）を意識している点で異なる。現状を保ちながら、死を静かに待っているといったものである。

G氏（76歳）は、面接中「死」という言葉を語り今がライフサイクルの最終段階であることを意識しながら、現在の状態を保とうとしていた。

『生きがいを感じたり、楽しみっていうのは今はないですね。しいて言うなれば、なるべく病気をしないことに気を付けるということですね。自己防衛です。自己防衛が最大の楽しみっちゃうか。悪い言葉で言えば、一食ごとに死を待つようなものですよ。』

今回WHO/QOL26の点数についてカテゴリー間で比較したところ、「現状を維持する」、「死を待つ」を目標としている協力者の点数が、他のカテゴリーを目標とする者より低かった。そのため、これらを「目標」としている者は現状に満足しているかどうか疑問が残された。さらに、これらの協力者は逐語録で抽出された個人と環境のストレングスの数も少なく、「目標」そのものの在り方やストレングスの引き出され方が点数に影響している可能性があり追跡調査が必要である。

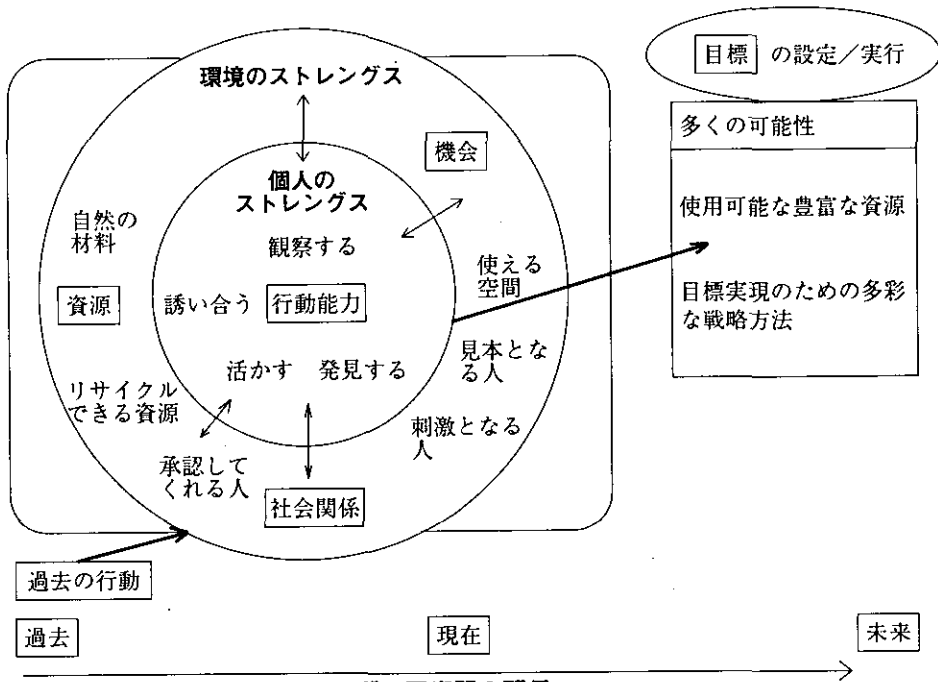


図3 ストレングス要素間の関係

## 2. ストレングス要素間の関係

図3<sup>11)</sup>には、それぞれのストレングス要素間の関係を示した。各ストレングス要素は時間的特性をもち、「過去の行動」は過去に位置し、「行動能力」、「社会関係」、「資源」、「機会」は現在に位置し、「目標」は未来に位置していると考えられた。この各要素の時間的配置から、「目標」はある個人が生きていく際の方向性を定める要素であり、他の要素は「目標」の設定やその達成のための条件や戦略となって「目標」を支えている要素と考えられた。このことは、「目標」を重視しているストレングスモデルの見解を支持するものとする。ただし、ストレングスモデルの中では、ストレングス要素の関連については具体的に明示しておらず、各ストレングスは目標達成や生活の質の決定要因であるとの示唆に留めている<sup>5)</sup>。先行研究には、生活の質を個人の価値や規範と環境の価値や規範の共鳴<sup>10)</sup>と論じるものがある。「目標」は価値の表現形の一つととらえられることから、今回の結果について、生活の質に影響を与える要因は、潜在的だったストレングス

が十分に引き出されることと共に、現在という時間枠の中で起こる個人と環境のストレングスの相互作用と言い換えることができる。すなわち“「目標」が定める未来に向かって、引き出された個人のストレングスが環境のストレングスを引き出す、あるいはその逆の状況”と考えられる。さらにそのことによって、「目標」の選択肢が増えたり、「目標」の達成に向けて使用できる資源や戦略方法が多様化することにつながると思う。そして、それがケアハウス内における適応的な生活や入居者の主観的な生活の質に関連するものと思われる。

## まとめ

ストレングスモデルは、精神障害者への実践からその有効性が示されている<sup>5)</sup>。本稿においても、ストレングスモデルが示す「目標」を始めとする6つのストレングス要素が具体的な形で認められた。このことから、生活の質の向上をめざした高齢者や高齢障害者への援助を展開する際には、



これら6つのストレングス要素が重要な機能をもつ可能性がある。他方、今回の結果では協力高齢者のストレングスとして「過去の行動」が認められ、Rappによるストレングスモデルでは提示されなかった時間的特質が高齢者のストレングスの重要な要素となり得る可能性がある。この点もふまえ、今後は、さらに協力者を増やし「目標」に含まれるその他のカテゴリーや、今回明らかにできなかったストレングス要素についても明らかにする必要がある。さらに、ストレングスが引き出されていくプロセスやそのパターンの相違についても居住空間の影響を加味しながら検討していきたいと考える。

#### 引用文献

- 1) 厚生省編『平成9年度版厚生白書』財団法人厚生問題研究所、1998年。
- 2) 狭間香代子「社会福祉実践におけるストレングス視点と社会構成主義」『社会福祉研究』No.17、1999年、85-95頁。
- 3) Weick,A., Rapp,C., Patrick Sullivan,W. Kisthardt,W. (1989) A strengths perspective for social work practice, 34, *Social Work*, p.350-354.
- 4) Saleebey,D. (1992) *The Strengths perspective in Social Work Practice*. Longman.
- 5) チャールズ・ラップ／江畑敬介監訳『精神障害者のためのケースマネジメント』金剛出版、1998年。
- 6) ホロウェイ・ウィラ?／野口実和子監訳『ナースのための質的研究入門』医学書院、2000年。
- 7) ストラウス、コービン／南裕子監訳『質的研究の基礎 グラウンデッド・セオリーの技法と手順』医学書院、1999年。
- 8) 世界保健機構・精神保健と薬物乱用予防部編『WHO/WOL26手引き』金子書房、1997年。
- 9) 川喜田二郎『発想法?創造性開発のために』中央公論社、1967年。
- 10) 三重野卓『「生活の質」と共生』白桃書房、2000年。
- 11) 坂上真理『高齢者の居住環境構造と意味空間』北星学園大学大学院修士論文、2001年。以上を発展させて図3を作成した。